慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	南朝鮮解放の政治力学(二・ 下) : 海外指導者の帰国と国内政治の再編成
Sub Title	The political dynamics of South Korean liberation (part II-2) : the return of leaders from abroad and the realignment of domestic politics
Author	小此木, 政夫(Okonogi, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2015
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.88, No.10 (2015. 10) ,p.1- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20151028-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南朝鮮解放の政治力学（二・下）

――海外指導者の帰国と国内政治の再編成――

小此木政夫

はじめに
一　海外独立運動指導者の帰国問題
1　戦争末期の李承晩外交
2　マッカーサー、ホッジと李承晩――東京会談
3　対ソ共同行動か、単独行動か――ラングドン構想
二　李承晩と独立促成中央協議会
1　李承晩の帰国
2　独立促成中央協議会――李承晩の統一戦線運動
3　朝鮮共産党の反撃――理論化と組織化
（以上、八十八巻八号）
三　金九と臨時政府の帰国
1　「トクスリ」浸透計画の挫折
2　統一戦線組織としての臨時政府
3　「臨時政府当面の政策」一四ヵ条
4　金九と臨時政府の帰国
5　左右両派の反応とホッジ、李承晩
おわりに
（以上、本号）

三　金九と臨時政府の帰国

1　「トクスリ」浸透計画の挫折

ウェデマイヤー中将が一九四四年一〇月に蔣介石総統の参謀総長兼中国戦域米軍司令官（Commander, US Forces, China Theater）に就任し、一二月に旧知のヘップナー（Heppner, Richard P.）大佐を支部長に指名してから、戦略諜報局中国支部（OSS/China）の組織的な再編と拡充が始まった。一九四四年一〇月まで一〇六名にすぎなかった要員数が、一九四五年七月までに一八九一名に達したのである。ヨーロッパ大戦の帰趨がほぼ決したので、OSSとしては、残された対日戦争の勝利に目立った勲功をあげることに組織の将来を賭けたのだろう。ドノヴァン局長の承認を得て、ヘップナーが野戦部隊の設置を命令したのは四月九日のことであり、翌日、クラウゼ（Krause, Gustav）が率いる四六名のOSS要員が昆明から西安に到着した。これ以後、西安がOSS中国支部の重要拠点に変身したのである。朝鮮への浸透工作を主要任務にするトクスリ計画（Eagle Project）は、西安を拠点にする複数の日本圏内（Japan's Inner Zone）浸透計画の最初のものであった。林炳稷によれば、一九四三年秋以後、李承晩はワシントンでOSSのグッドフェロー（Goodfellow, M. Preston）大佐と接触して、米国内に在住する韓国系青年たちを訓練して、朝鮮に浸透させる計画に協力したが、彼らの不十分な日本語能力などのために、それが大きな成果をあげることはなかった。ヘップナーは中国在住の韓国系青年、とりわけ日本軍から脱走した学徒兵たちに着目して、これを成功させようとしたのだろう。すでに指摘したように、それはウェデマイヤーが示唆し、三省調整委員会で承認された方針にも合致していた。(56)

事実、日本軍から脱走した学徒兵は、日本語に精通していただけでなく、日本で高等教育を受け、出身地である朝鮮の事情を熟知していた。そのうえ、工作員に不可欠なもの、すなわち日本軍に対する敵愾心と任務に対す

る忠誠心を備えていたのである。その指導的な人物の一人であった張俊河は、一九四四年七月に徐州郊外に駐屯する日本軍部隊から三名の同志と共に脱走し、途中、安徽省阜陽（臨泉）でその他の脱走兵などと合流し、翌年一月末に重慶にある大韓民国臨時政府庁舎に到着した。総勢四七名であった。四月末、そのうちの三〇名余りが西安に向かって、李範奭将軍の指揮する韓国光復軍第二支隊に合流し、ＯＳＳ隊員としてトクスリ計画のための訓練を受けたのである。それは米軍の朝鮮西海岸への上陸を想定して、事前に朝鮮内に浸透して諜報活動、情報送信、後方攪乱などを実行するための特殊訓練であった。五月一一日に、トクスリ計画の指揮官であるサージェント（Sargent, Clyde B）大尉が西安郊外の杜曲にある訓練基地に到着し、一二五名の第二支隊員から五〇名を選抜した。彼らが第一期生として無線、遊撃、爆破、パラシュート降下など三ヵ月間の訓練に入ったのである。また、そのうちの三六名が八月四日に訓練を完了し、京城、釜山、平壌、新義州、そして清津への浸透作戦の発動を待機する態勢に入った。張俊河は他の三人の隊員とともに京城に浸透する予定であった。[57]

トクスリ計画は戦闘作戦ではなかったが、臨時政府や光復軍が米諜報機関に全面的に協力するはじめての重要な浸透作戦であった。それに参加する韓国人隊員を激励するために、八月五日に金九主席、李青天・光復軍総司令、厳恒燮宣伝部長らが米軍機で重慶を出発し、八月七日に西安郊外の杜曲にあるトクスリ基地を訪問した。また、その機会を利用して、金九は八月第一週に中国を訪問するドノヴァン局長と会談しようとした。ドノヴァンは五日に昆明のＯＳＳ本部を視察した後、重慶でウェデマイヤー司令官と会談し、さらに六日に蔣介石総統と非公式に会談し、七日に西安を視察したのである。サージェントは八月五日に二通の電報を送り、大韓民国臨時政府の金九主席がドノヴァンとの会談を強く要請していることを伝え、浸透計画に韓国人青年が参加しているので、金九主席に敬意を表して、トクスリ基地で昼食か夕食を共にするように要請した。それが功を奏して、八月八日早朝、ドノヴァン局長は杜曲を訪問し、滞在中の金九、李青天そして李範奭と会談したのである。ドノヴァンに

は何の躊躇もなかったようである。サージェントへの返信で、ヘリウェル（Helliwell, Paul L. E.）大佐は「ドノヴァン将軍はトクスリに強い関心をもち、できるだけ早期に浸透が達成されることを熱望している」と伝えた。金九の回想によれば、その日の会談は光復軍第二支隊本部の事務室で開かれ、正面右側に太極旗、左側に星条旗が置かれた。立ち上がったドノヴァンは「本日から、アメリカ合衆国と大韓民国臨時政府との敵国日本に抗拒する秘密工作が開始される」と宣言したとされる。(58)

その翌々日、すなわち八月一〇日、サージェントに代わって、浸透チームを指揮するバード（Bird, Willis）中佐がトクスリ基地に招集され、張俊河らの隊員に特別待機命令が下された。バードと李範奭は四人ずつで構成される三チームを朝鮮に浸透させることを決定したのである。その最初のチームが一週間以内、すなわち八月二〇日までに出発する予定であった。しかし、そのときには、すでに八月六日に広島に原子爆弾が投下され、八月九日にソ連が参戦し、第二次世界大戦は最終局面に入っていた。一〇日には、条件付ながら、日本政府からポツダム宣言受諾の意思が伝えられたのである。ヘップナーがその報せを受け取る直前に、ドノヴァンは昆明からワシントンに向かう特別便に搭乗していた。また、西安市内に滞在していた金九は、その報せを旧友である祝紹周・陝西省主席の私邸で聞かされた。そのときに、「ああ！　倭敵（日本の蔑称）の降服！　それは私には朗報というよりは、天が崩れ落ちるような事件であった」（括弧内引用者）と慨嘆したのである。金九の慨嘆はトクスリ計画に賭けた期待の大きさを物語っていたが、浸透作戦としてのトクスリ計画の実施は留保されざるをえなかった。しかし、ドノヴァンもヘップナーも、そしてウェデマイヤーも、すでに準備が完了しているトクスリ計画を捨て去ることはなかった。韓国人要員を含むＯＳＳチームが誰よりも早く京城に到達することを期待したのである。何よりも、ソ連が対日参戦し、北朝鮮への進攻を開始したことが意識されていた。ワシントンに向かう前に、ドノヴァンはウェデマイヤーに「もしロシア人が朝鮮と満洲に到着したときに我々がそこにいなければ、我々は二

度と入り込めないだろう」と記していた。[59]

結局、トクスリ計画は形を変えて実行に移された。後に南朝鮮に進駐する第二四軍団の先遣隊の一部は九月四日に京城第一飛行場（金浦飛行場）に到着したが、それよりも二週間も前、すなわち八月一八日早朝に、C－47輸送機一機が西安飛行場を離陸し、永登浦上空でビラを散布した後、正午少し前に京城の龍山飛行場（汝矣島飛行場）に着陸したのである。バード中佐に率いられた二二名のOSS隊員と乗務員が搭乗していたが、そのなかには李範奭、張俊河、金俊燁、魯能瑞の四名の韓国人隊員が含まれていた。浸透計画は戦争捕虜救出計画に姿を変えて、ウェデマイヤーの承認とドノヴァンの特別命令の下で実行に移されたのである。その目的は京城、仁川、釜山の捕虜収容所で戦争捕虜と接触して、撤収方針を支援し、撤収計画案を策定することであった。突然の米軍機の飛来に驚いて、龍山飛行場には上月良夫司令官、菅井潤次郎参謀長らと警備兵が集まったが、その目的が降伏手続に関するものでないことを確認すると、東京の大本営からの指示がないことを理由に、ただちに退去することを要求した。OSSチームは燃料補給のために飛行場内で一泊し、翌日、給油を受けて離陸せざるをえなかった。しかし、同じ八月一九日には、第二四軍団司令官のホッジ中将が在朝鮮米軍司令官に任命された。こうして、短期間のうちに、朝鮮半島は中国戦域から切り離されたのである。トクスリ計画の中止が正式に伝えられたのは、八月二九日のことであった。[60]

トクスリ計画に賭けたドノヴァンの期待はついに達成されなかった。それどころか、ドノヴァンの賭けは完全に裏目に出た。八月一七日に、金九はトルーマン大統領に日本の降服を祝賀する電報を送ることをヘップナーに依頼し、その祝賀電報のなかで「我々の希望は対日戦争の最後の数ヵ月間に中国で始まった米韓の積極的な協力が継続し、成長することである」と訴えた。また、八月一八日、それを大統領に伝えたドノヴァンの覚書には、「我々は朝鮮に情報工作員を送り込むために彼と協力している」とする説明が添えられていた。しかし、それに

対するトルーマンの不興は異例なほどに激しかった。八月二五日、トルーマンは「米国政府によって承認されていない自称政府の代表たちからのメッセージを私に伝えるためのチャンネルとして、貴官の要員が行動することの不適切性」について、ドノヴァンに皮肉たっぷりに忠告したのである。ドノヴァンに対するローズヴェルトの信頼がトルーマンに引き継がれることはなかったのである。大戦末期の任務を終えたＯＳＳは、一〇月一日にその機能を停止した[61]。

2　統一戦線組織としての臨時政府

朝鮮独立運動の最も不幸な特徴は、その運動全体を統合する単一のイデオロギーとリーダーシップを欠いたことだろう。その結果として、独立運動は地理的に分散したまま、さまざまな形態で個別的に展開されたのである。しかし、一九一九年に朝鮮内で発生した三・一独立運動は、第一次世界大戦後に昂揚した民族自決主義という国際潮流を背景にして、全国的な民衆蜂起を伴って展開された。また、そのことが海外の独立運動に大きな衝撃を与え、一時的にしろ、それらを統合する契機になった。国内で宣言された漢城政府、ウラジオストクの大韓国民議会、そして上海に設置された大韓民国臨時議政院が、九月に組織的に統一され、上海に大韓民国臨時政府が樹立されたのである。しかし、三政府の統合に最も功績のあった安昌浩は、独立戦争が可能になるまでの間、実力培養のために努力するという民族自強論者であったが、ウラジオストクから到着し、国務総理に就任した李東輝は積極的な独立戦争論者であり、コミンテルンの援助に頼るボルシェビキであった。他方、大幅に遅れて翌年一二月に上海に到着し、臨時大統領に就任した李承晩は、すでにみたように、外交活動を重視する親米・反ソ主義者であった。李承晩の上海到着が三者、とりわけ「二人の李」の間にイデオロギーとリーダーシップの激しい衝突を招来したのである。翌年一月、李東輝は国務総理を辞任して臨時政府を去り、高麗共産党を創立する運動に

邁進した。しかし、安昌浩、金奎植などの指導者が相次いで臨時政府を退去すると、李承晩も五月に上海を離れ、ハワイを経由して、八月にはワシントンに復帰した。多くの有力指導者を失った臨時政府は統一戦線組織としての機能を喪失し、ほとんど名目だけの存在になってしまったのである。[62]

一九二五年三月に李承晩大統領が臨時議政院で弾劾された後、分裂し、低迷する臨時政府を救ったのは、当初、その警務局長にすぎなかった金九である。農村出身の素朴な人柄で知られる金九は、李承晩や安昌浩のように欧米を体験した開化派の知識人ではなく、農民を基盤にする土着宗教である東学から出発し、義兵、啓蒙運動、農村復興運動を経験し、三・一蜂起の後、一九一九年四月に上海に到着して臨時議政院に参加した。上海に樹立された臨時政府が大統領制から国務領制（議院内閣制）、そして国務委員制（主席輪番制）に改編された後、一九二七年二月に国務委員に選出され、やがて内務長そして上海僑民団長に就任した。さらに、一九三〇年一一月に財務長に就任した金九は、困窮する臨時政府を救うために、シカゴ、サンフランシスコ、ハワイなどの僑民からの資金調達に努力した。また、一九三一年九月に満州事変が勃発し、万宝山事件などのために中国内の対韓国人感情が悪化するなかで、愛国団を結成して、義烈闘争（テロリズム）によって難局を打開しようとした。一九三二年一月に李奉昌が桜田門外で天皇に爆弾を投じたり、四月に尹奉吉が上海の虹口公園で挙行された大観兵式と天長節祝賀会を爆弾で襲ったり、五月に朝鮮総督や関東軍司令官の暗殺を試みて発覚したりした事件は、いずれも金九が指導するものであった。尹奉吉が投じた爆弾は式典の壇上で炸裂し、白川義則上海派遣軍司令官・大将を殺害し、植田謙吉第九師団長・中将、野村吉三郎第三艦隊司令長官・海軍中将、重光葵公使らに重傷を負わせた。しかし、日本の官憲の厳しい追及によって、安昌浩が逮捕され、臨時政府も五月に杭州に移転せざるをえなくなった。[63]

金九の独立路線の大きな特徴は、テロリズムを含む激烈な民族主義であり、臨時政府に対する一貫した忠誠心

であった。それは宗教やイデオロギーさえ超越していた。共産主義運動に対しても、その国際主義的な側面だけを批判したのである。その自叙伝『白凡逸志』によれば、金九が理想としたのは、己未の年、すなわち大韓民国元年（一九一九年）の頃に、「国内、国外を問わず、精神が一致し、民族独立運動にのみ邁進していた」ときのことである。コミンテルンの指導を受ける李東輝からの勧誘に対して、金九は「我々の独立運動は我々大韓民族の独自の運動です。どこかの第三者の指導や命令に支配されることは、他人に依存することだから、わが臨時政府の憲章に違反することになります」と反論した。また、一九三五年七月、金元鳳（金若山）を中心に金斗奉、金奎植、李青天、趙素昂、申翼熙などが、左右の政治勢力を網羅した民族革命党を結成し、対日戦線の統一を図ったときにも、金九はそれに参加しようとしなかった。金元鳳を含む一部勢力を共産主義者とみなしただけでなく、臨時政府が解体されることに強く反対したからである。しかし、その金九にとっても、義烈闘争の最大の成果は蔣介石総統との会談が実現したことであった。陳果夫・国民党中央組織部長兼江蘇省政府主席の仲介によって、南京中央軍官学校の構内で実現した会談で、蔣介石は「東方の各民族は孫中山先生の三民主義に合致する民主政治を行うのがよいだろう」と語った。また、金九が日本、満洲、朝鮮の三方面で暴動を起こすことを主張すると、蔣介石は将来の独立戦争のために韓国人武官を養成することを勧めて、一九三三年八月に洛陽軍官学校分校にそのための訓練班を開設した。ただし、日中戦争が開始されるまで、蔣介石による韓国独立運動に対する支援は抑制されていたし、軍官学校での訓練は金九のライバルであった金元鳳や李青天にも提供されていた。(64)

一九三七年七月に日中戦争が開始されると、中国政府は南京陥落以前の一一月に重慶への首都移転を発表し、持久戦に入る方針を明確にした。臨時政府とその要人たちは武漢、長沙を経て、一九三八―三九年に柳州（広西省）および重慶（四川省）郊外の綦江に移動し、一九四〇年九月に重慶市内に入った。また、その間に、蔣介石は朝鮮独立運動への支援を公然化し、左右両勢力の統合を強く要求した。一九三八年一二月に金九を、さらに翌

年一月に金元鳳を重慶に招いて、両者に大同団結を強く要請したとされる。事実、金九は重慶郊外にある民族革命党と朝鮮義勇隊の本部を訪れて、「すべての団体を統一して民族主義の単一党をつくる」（傍点引用者）ことを提案した。金元鳳は桂林に行って留守であったが、「その場にいた人は一致して賛成してくれた」とされる。その結果として、一九三九年五月、金九と金元鳳は共同名義で「同志同胞諸君に送る公開通信」を発表したのである。さらに、八月には、両金が合意した一〇項目を基礎に、単一政党を結成するための七党統一会議が綦江で開催された。朝鮮民族解放同盟と朝鮮前衛青年同盟の退場によって、また数日後の金元鳳の脱退によって、七党派の統一は実現しなかったが、民族主義三党派の結束が進展し、一九四〇年五月には臨時政府の与党になる韓国独立党の創立大会が開催された。また、中国政府の承認を得て、臨時政府は九月には李青天を総司令、李範奭を参謀長とする韓国光復軍を創設し、西安に司令部を置いた。臨時議政院も一〇月に臨時約憲を改正して、国務委員会の主席を臨時議政院で選出して、主席が内外に臨時政府を代表し、軍隊を総括する主席制を採用した。金九の指導力が制度的に強化されたのである。さらに、一九四一年六月には、ワシントンに臨時政府の駐米外交委員部を設置し、李承晩を委員長に任命した。最後に、一一月末、臨時政府は「革命的三均制度」（政治、経済、教育の均等）による復国そして建国を目指して、金九主席を含む七人の国務委員の名義で「大韓民国建国綱領」を制定し、公表した。(65)

一九四一年一二月に日米戦争が開始されると、中国政府による朝鮮独立運動に対する支援が本格化した。一〇月三〇日の蔣介石委員長の指示（「陷川侍六代電」）に基づいて、日米開戦後の一二月、中国政府軍事委員会は中国内のすべての革命党派を臨時政府と金九主席の下で指導、育成する、時機を逸することなく臨時政府を承認する、独立運動の武装力を早期に韓国光復軍に結集する、中国側の資金援助の窓口を一本化するなどの方針を作成したのである。他方、金九と韓国独立党だけでなく、金元鳳と民族革命党も、翌年春以後、新しい情勢の下で左

右合作を推進するとの方針を固めた。ただし、金元鳳は「先軍事統一、後政治統一」を主張し、民族革命党の臨時政府への参加よりも武装組織の統合を先行させた。一九四二年七月、金元鳳の下に残った朝鮮義勇隊が韓国光復軍に合流し、その第一支隊に改編されたのである。李元鳳は副司令に任命された。また、民族革命党その他の臨時政府への参加は、国務会議が八月に臨時議政院議員の選挙規程を制定し、一〇月に各党派が臨時議政院の半数改選に参加する方式で実現した。その後、国務委員（閣僚）も増員され、金奎植と張健相が宣伝部長と学務部長に選出された。しかし、臨時政府が統一戦線組織の面貌を取り戻したのは、一九四四年四月の臨時憲章の制定によってである。国務委員会主席・副主席制が採用され、国務委員も大幅に増員されたのである。金九主席、金奎植副主席に加えて、韓国独立党から李始栄、趙素昂など八名、民族革命党から金元鳳、張健相など四名、朝鮮革命者連盟から一名、朝鮮民族解放同盟から一名が国務委員に選出された。臨時政府はついに左右合作を成就し、複数政党による連立政府になったのである。(66)

一九一九年に樹立された上海臨時政府と比べて、一九四四年の重慶臨時政府には日中戦争と日米戦争という独立運動に有利な国際情勢があり、日本がやがて敗北するとの予感もあった。さらに、カイロ宣言に示された朝鮮の将来の「自由・独立」の誓約だけでなく、蔣介石政権からの物心両面からの支援が存在した。金九が金元鳳との競争で優位に立つことができたのは、一貫して臨時政府を守護してきたからであり、蔣介石がその臨時政府を支持したからだろう。しかし、「民族主義の単一政党」が実現しなかっただけでなく、そもそも、重慶臨時政府という統一戦線に参加しなかったグループも存在した。中国国民党よりも中国共産党を選んだ朝鮮人共産主義者たちである。七党統一会議の決裂後、そこから脱退した民族解放同盟と前衛青年同盟は、武漢陥落後に中国共産党支配地域に移動し、一九四一年一月に山西省の桐谷で華北朝鮮青年連合会を組織し、さらに翌年八月、金枓奉、崔昌益、韓斌らの指導の下で華北朝鮮独立同盟を結成した。同じように、朴孝三らに率いられた朝鮮義勇隊は、

中国共産軍に身を投じていた武亭に迎えられて、朝鮮革命青年幹部学校に収容され、やがて数百人規模の朝鮮義勇軍に改編された。ただし、中国国民党と共産党の関係と同じく、その後の臨時政府と独立同盟の関係は必ずしも敵対的ではなかった。統合を拒否しつつも、適度の連携が保たれたのだろう。しかし、後にそれ以上に重要な意味をもったのが、中国東北地域（満洲）で中国共産党系のゲリラ組織である東北抗日連合軍に加わり、一九三〇年代後半に抗日遊撃闘争を展開した金日成、崔賢、金策らの共産主義者たちである。彼らは延安に集まった共産主義者とも、南朝鮮で朝鮮共産党を再建した共産主義者とも無縁であり、その大部分は一九四〇年から四一年にかけての冬に満洲からシベリアに逃亡し、ソ連極東軍に収容された。その後、中国人隊員とともに、ハバロフスク郊外で対日戦争のための浸透訓練に励んだのである。(67)

3 「臨時政府当面の政策」一四ヵ条

西安で日本降服の報せに接した金九は急いで杜曲に戻ったが、京城に向けて出発するトクスリ隊員たちを見送ることはできなかった。隊員たちの出発と同じ一八日に、民間機で重慶に戻ることになったからである。しかし、金九不在の間に開かれた臨時議政院は混乱していた。党派対立が再燃し、臨時政府の解散論や国務委員の総辞職論が噴出して、三日間の休会に入っていたのである。八月二二日午後二時からの会議で、金九は「我々の臨時政府は、己未（一九一九）年三月一日に、本土である国内で我々の血を流した結果として一三道代表が集まって組織したが、あまりにも圧迫が激しいので上海に組織されたものである。その後二十余年の間努力してきた。我々の手で倭奴を追い詰めることができずに遺憾ではあるが、今日、重慶に来て、精神的にも、質と量も、以前と比べてたいへん進歩したように思う」（括弧内引用者）と指摘して、二つの方針を提示した。第一は臨時政府の国務委員が団結して、速やかに内地に帰ることであり、第二は中国軍が朝鮮に入るときに、それに光復軍を配合する

（同行させる）ことであった。また、金九はトクスリ浸透計画の訓練や出撃の模様についても付言して、韓国人OSS隊員が高い評価を得ていること、一四日に韓国人隊員を乗せて京城に向けて出発した飛行機が、一度引き返して、一八日再出発したことなどを具体的に報告した。[68]

ところで、この日の午前中、臨時議政院を休会にして、金九は中国国民党中央党部で呉鉄城秘書長と会談した。日本降伏後はじめて開かれた中韓の高位級会談で、双方は率直に意見を交換し、その後の基本方針を設定したのである。中国側の記録によれば、呉鉄城の主張は（1）韓国人民および韓国臨時政府に対して、日本が降服して、韓国独立の所望がまもなく達成されることに祝賀を表明する、（2）八年間の抗日戦戦争の間、中国は韓国独立のために物質的、精神的に膨大な援助を提供したし、カイロ宣言がまさに韓国の独立を保障している、（3）まず韓国の各党派が団結して、独立運動を完遂することを希望する、（4）中国政府は臨時政府が祖国に戻り、韓国国民を領導して選挙を実施し、民選の正式政府を樹立するように支援する、（5）前項を実践するために、連合国の協助の下で、韓国独立関係者たちが共同で臨時政府を組織した後に選挙を実施して、民選政府を樹立することを希望する、（6）連合国が韓国に上陸した後に、一種の過渡政府として軍政を実施する場合、韓国の多くの革命同志たちがこれに参与することを希望する、（7）聞くところによれば、韓国北部にはソ連軍隊が上陸し、南部には米国軍隊と中国軍隊が合同で上陸し、敵の武装を解除する、（8）個人的な推測として、韓国は信託統治ないし軍政の過渡期を経て、将来、ポーランド方式で統一された臨時政府を成立させることが可能になるだろう、というものであった。金九は、これに対して、（1）中国国民党と韓国独立党との歴史的な関係がさらに深く発展することと、国民党のさらなる積極的な支援によって共産主義勢力の伸張を防止することを希望し、（2）中国政府が大韓民国臨時政府を即時かつ正式に承認し、もしそれができない場合には、臨時政府が帰国して、各方面の指導者を糾合し、新しい臨時政府を樹立した後に、それを率先して承認することを要望した。[69]

前述したように、この日の午後に開かれた臨時議政院の会議で、金九は朝鮮に進駐する中国軍に韓国光復軍を同行させることを主張したが、それは朝鮮南部に米中両国の軍隊が上陸するとの呉鉄城からの情報に基づくものであった。興味深いことに、朝鮮の分割占領を示唆しつつも、呉鉄城は朝鮮半島が中国を含む連合国によって共同占領されるものと理解していた。朝鮮半島の共同占領や信託統治に関する米国の方針が中国政府に伝えられていたのである。また、呉鉄城は臨時政府を過渡的な選挙管理政府を樹立するための一つの母体以上のものとみなしていなかった。言い換えれば、総選挙を実施するためにはさらに広汎に独立運動指導者たちを網羅する新しい臨時政府が必要になると考え、ポーランド方式で統一された臨時政府まで想定したのである。他方、金九は呉鉄城に臨時政府の即時承認を要請し、臨時議政院でも「ソウルに帰って、国民全体の前に政府を奉還するまで現状のままで行くのが正しい」と主張した。その後、中国側から得た情報や助言を検討しながら、金九が自らの政策を具体化したのが、日本政府が降伏文書に署名した翌日、すなわち九月三日に金九主席名義で発表された「国内外同胞に告げる」であり、そこに表明された「臨時政府当面の政策」一四ヵ条である。(70)

金九によれば、現段階は「建国の時期に入ろうとする過渡的段階」であった。建国綱領によれば、それは「復国の任務をまだ完全に終えることができず、建国の初期が開始されようとする段階」にほかならない。そのために、臨時政府の任務は繁多かつ複雑であり、その責任は重大であった。さらに、それは緻密な分析、明確な判断、そして勇気ある処理を必要とした。事実、金九が一四ヵ条に整理した「臨時政府の当面政策」は、呉鉄城の助言をほぼ正確に反映するものであり、けっして硬直したものではなかった。確かにその第九条は「国内の過渡政権が成立される前には、国内の一切の秩序と対外の一切の関係を本政府が責任を負って維持する」（傍点引用者）と規定していた。それは臨時政府を率いてきた者の自尊心だろう。しかし、その第六条は「国外任務の結束と国内任務の展開が互いに接続するので、必需的な過渡的措置を執行するが、全国的な普通選挙によって正式な政権が

樹立されるまでの国内過渡政権を樹立するために、国内外各階層、各革命党派、各宗教団体、各地方代表と著名な各民主領袖の会議を招集するように積極的に努力する」（傍点引用者）と規定していた。呉鉄城が示唆したように、臨時政府は全国的な普通選挙を実施するための国内過渡政権、すなわち選挙管理政権を樹立するための会議の招集母体として位置づけられたのである。さらに、その第七条は「国内過渡政権が樹立され次第、本政府の任務は完了したものと認め、本政府の一切の職能および所有物件は過渡政権に交還する」と規定していた。(71)

4　金九と臨時政府の帰国

金九はできるだけ迅速に帰国しようとした。しかし、第一に、臨時政府としての帰国は米軍による南朝鮮占領、とりわけ直接軍政の施行と正面から衝突した。米軍の進駐が大幅に遅延したうえに、一〇月中旬に統合参謀本部からマッカーサーに伝達された「初期の基本指令」（SWNCC 176/8）は、自称臨時政府やそれに類する政治団体の公認や利用を明確に禁止していたのである。金九が臨時政府を率いて帰国することを許可することは、米軍当局にとっては、ワシントンからの指令に違反し、軍事政府の基礎を危うくすることにほかならなかった。第二に、すでにみたように、南朝鮮内の左派勢力に対抗するために、マッカーサーもホッジも、李承晩「個人」の帰国を優先し、その名声を利用しようとした。言い換えれば、李承晩を中心にする政党連合の実験が終わるまで、それを不確実にする金九と臨時政府の帰国は歓迎されなかったのだろう。第三に、さまざまな客観的要素が金九と臨時政府要人の帰国のために不利に作用した。たとえば、日本の降服意思が明確になるやいなや、朝鮮は中国戦域から切り離され、太平洋戦域に編入された。航空兵力中心の中国戦域には、南朝鮮占領を担当するだけの地上軍部隊が存在しなかったからである。言い換えれば、トクスリ浸透計画はウェデマイヤーとＯＳＳが管轄する最初で最後の朝鮮作戦になったのである。これ以後、南朝鮮への入域許可も、そのための航空機の手配も、マッカー

サーとホッジに依存せざるをえなかった。さらに、ソ連軍が北部朝鮮に進駐したために、陸路で南朝鮮に帰国することも不可能になった。[72]

しかし、終戦当初、それらのことは必ずしも自明ではなかった。金九はまず蔣介石側近の呉鉄城と接触し、李範奭はウェデマイヤーとの折衝を重ねたのである。困惑したウェデマイヤーが第七艦隊に便乗して帰国する方法を示唆したので、張俊河は九月三日に昆明を経由して上海に向かった。しかし、いうまでもなく、その希望が達せられることはなかった。他方、すでにみたように、九月二五日、中国政府の呉国楨宣伝部長は米国大使に蔣介石の意向を伝え、臨時政府要人たちが帰国して何らかの行政的役職に就くことを希望した。また、九月二六日午後二時には、蔣介石と金九の会談が官邸で開催された。このとき金九は、北朝鮮ではソ連の支援の下で人民委員会が組織され、南朝鮮では各種の政党と社会団体が乱立しているが、多数の国民は臨時政府が一日も早く帰国し、統一事業を主導することを渇望している、と主張したとされる。中国側の記録によれば、金九は二つのことを具体的に要望し、蔣介石に米国政府と交渉してくれるように依頼した。第一は、臨時政府の人員を飛行機で帰国させてくれることであり、第二は、もし臨時政府の名義で帰国することが不可能な場合、彼らがまず帰国してから、国内の各党派と協力したうえで臨時政府を設立し、その後、臨時政府が全国的な選挙を通じて正式政府を設立できるようにすることであった。それが金九と臨時政府の政策であり、統一戦線論だったのである。「当面の政策」に示された金九の政治的立場に変化はなかった。しかし、すでにみたように、そのような役割が注目されるのは、李承晩の政党連合運動が失敗に終わり、ソウルに赴任したラングドン政治顧問代理が「統治委員会」を構想した頃、すなわち一一月後半になってからのことであった。奇妙なことに、その頃になってはじめて、米国大使館はマッカーサーが一〇月上旬に金九の帰国を承認していたことを中国政府に伝えたのである。[73]

金九一行、すなわち金九、臨時政府要人そして随員の合計二九名は、専用機二機に搭乗して、一一月五日午前

七時に重慶を離れて上海に向かった。そこで米軍機に乗り換えて帰国しようとしたのである。その約一ヵ月前、すなわち一〇月七日、金九は蔣介石に、すでに要請していた五千万元に加えて、帰国に必要な装備および諸費用として五千万元、さらに帰国後の活動費用として米貨五〇万ドルの借款を要請した。これに対して、蔣介石は一〇月二三日に最初の五千万元の発給を承認し、一〇月三〇日にさらに五千万元と米貨二〇万ドルの発給を許可した。それに加えて、蔣介石は中国航空当局に指示して、金九一行のために専用機二機を用意したのである。出発の前夜、蔣介石総統は中国政府、国民党そして各界の要人が参加する盛大な送別宴を開催した。しかし、それにもかかわらず、金九と臨時政府の帰国について、中国政府と米国政府ないし米占領軍当局との間に明確な合意が成立していたかどうかは疑わしい。当初から、米軍機がいつ到着するかが不明だったからである。一〇月三一日、上海での宿所提供について、金九は銭大鈞市長に協力を要請するように呉鉄城に依頼したが、その間の事情を「私ども一行が上海に到着した後、再び米国飛行機に乗り換えて帰国するまで、その期間はたとえ短くとも、宿所問題がとても不便であると思われる」と表現した。また、すでに上海に滞在していた張俊河は、金九らの上海到着の一週間前に米軍機派遣のニュースを聞いたと証言しているが、実際に米軍機が到着したのは一一月二三日のことである。その間に、約三週間の日時が経過していた。言い換えれば、ホッジが派遣したC－47一機が江湾飛行場に到着したのは、重慶を出発した金九と臨時政府要人たちが上海で待機したまま南朝鮮に入国できず、そのことがソウルで物議をかもすようになってからのことである。(74)

たとえば一一月一九日の『自由新聞』は、金九主席一行の上海到着が米国のUP通信などで報じられているのに、彼らがなぜ入国できないのかを論じ、軍政当局が「個人の資格」での入国を要求しているのに対して、臨時政府側は「何らかの種類の承認」を要求し、入国後、できるだけ早期に完全独立政権を樹立する計画をもっているからではないかと推測した。これに対して、金錫璜・臨時政府歓迎準備委員長は「臨時政府要人たちが帰還し

ない原因は、どこまでも政府の資格で帰還する方針だからであり……個人の資格で帰ってくるのであれば、我々の失望は大きいだろう」と指摘した。また、安在鴻・国民党委員長は、軍政首脳は民族反逆者や親日派を識別することに困難を感じていると指摘して、「臨時政府が承認を受けた政府の資格で帰ってきて、統一政府が樹立されれば、軍政府が現在、困難を感じているあらゆる難問を容易に解決できるだろう」と主張した。しかし、それにもかかわらず、ホッジ司令官の金九と臨時政府に対する態度は冷淡であった。ソウルから上海派遣された軍用機は中型輸送機一機だけであり、臨時政府の要人たち全員を一度に運ぶには不十分であった。ホッジは臨時政府要人たちが一団になって帰国し、「政府」のイメージが形成されることを警戒したのだろう。一一月二三日に帰国できた要人は、金九主席、金奎植副主席、李始栄国務委員、金尚徳文化部長、厳恒燮宣伝部長、柳東悦参謀総長であり、鮮于鎭などの随員を加えて、全員で一五人にすぎなかった。一行は午後一時に上海を発ち、四時四〇分頃に金浦飛行場に着陸した。(75)

張俊河によれば、金浦飛行場には六台の装甲車両が待機しており、それに数人ずつ分乗して、外部との接触を断たれたまま、午後五時過ぎに鉱山王・崔昌学の邸宅である西大門近くの竹添荘に到着した。また、その後まもない午後六時に、ホッジ司令官が「本日午後、金九先生ら一行一五名がソウルに到着した。久しく亡命中であった愛国者金九先生は個人の資格でソウルに帰郷したものである」（傍点引用者）と発表した。しかし、金九らの帰国は事前に李承晩に知らされていたようである。李承晩は午後六時過ぎに竹添荘を訪れた。二四年ぶりの再会であった。午後八時に、厳恒燮宣伝部長が記者会見に臨み、用意されていた帰国声明と「臨時政府当面の政策」一四ヵ条を配布し、読み上げた。その声明において、金九はまず革命の先烈と同盟国の勇士に弔意を表明し、臨時政府を支援してくれた蔣介石、南朝鮮にある米軍、そして北朝鮮を解放したソ連に敬意を表明し、さらに「この戦争の勝利の唯一の原因は同盟という約束を通して相互に団結し、協調したところにある」と強調した。また、

「私と私の閣僚はそれぞれ一個の市民の資格で帰国した」と確認し、「私と私の閣僚はただ完全に統一された独立自主の民主国家を完成するために余生を捧げる決心をもって帰国した」（傍点引用者）と続けた。事実、上海を出発するときから、金九は「あらゆることに白紙で対する」「一党一派を支持するという態度ではなく、国内諸勢力を糾合し、統一政権の樹立のために力を尽くす」と語っていたのである。[76]

翌日の早朝、金九は宋鎭禹、鄭寅晋、安在鴻、金炳魯、権東鎭、金庄淑らの訪問を受けた後、敦岩荘に李承晩を答礼訪問し、続いて米軍政庁にホッジ司令官とアーノルド軍政長官を表敬訪問した。その後、午後一時半に帰国後最初の記者会見が開かれた。それは前日の記者団との約束に従って非公式的に設定されたものであった。最初の質問はもっとも微妙な統一戦線の結成に関するものであったが、金九は「私に李博士以上の手腕があると信じないでください」と述べ、さらに「まず統一して不良分子を排除するのと、排除しておいて統一するのと、二通りがあるが、結果において前と後は同一になるでしょう」「これは重大な問題なので軽率に話すことはできない」と注意深く答えた。また、帰国第一夜の感想については、「正直いって、自分の魂が帰ってきたものやら、肉体が帰ってきたものやら、まだみさだめがつかない心境です」と素朴に表現した。しかし、入国の資格について質問されたときには、「わが韓国には、現在、軍政が実施されている関係から、対外的には個人の資格になるでしょう。けれども、我々韓国人の立場からすれば、臨時政府が帰国したことに変わりありません」と、その立場を明確に表明した。また、その点について、マッカーサー将軍には「現在、朝鮮に軍政がある以上、完全な我々の政府がありえないということは理解する」と伝えたと紹介した。しかし、金九はその後の応答を厳恒燮宣伝部長に委ねた。また、その日の午後八時、金九はラジオのマイクに向かって帰国の挨拶をした。しかし、発言内容を警戒した米軍当局がわずか二分間しか許容しなかったので、金九は自分と閣僚が「平民の資格」で帰国したことを告げ、「これから全国の同胞が一つになって、我々の国家独立の時間を最小限度に短縮させましょう」

と呼びかけるだけであった。[77]

公式の記者会見は一一月二六日午前一〇時から米軍政庁第一会議室で開催された。しかし、ホッジ司令官の丁重な紹介があった後も、「朝鮮の将来の建国事業にいかなる政策があるのか」について、金九は重々しい口調で「遺憾ながら、本人は帰国して数日にしかならないので、国内の諸般の事情を確実に知ることができない。また、臨時政府の閣僚たちがみな帰国したわけではなく、具体的な計画を樹立できないので確言できない」と語るのみであった。事実、翌日一一時三〇分から、金九は各党派の領袖と連続的に会談し、それぞれの意見を聴取したのである。最初に到着したのは国民党の安在鴻であった。安は、現在の混乱を収拾するために、新たに過渡政権を樹立することなく、臨時政府が直接執権するように進言した。次に、韓国民主党の宋鎭禹と会談した。宋は臨時政府の正統性を力説し、連合国への使節派遣、臨時政府の実務組織の早急な整備、光復軍を母体にする国軍の編成など、五項目を建議した。また、午後三時に、金九は人民党の呂運亨とも会談した。会談の内容は回顧談が中心であったが、呂は弁明的な口調であったとされる。午後四時に、人民共和国の許憲が李康国を伴って現れた。許は、人民共和国を組織した経過を実務的な口調で説明し、親日派と民族反逆者を除いた全国的な代表として、人民委員五五名を選出したことを報告した。許は金九の指導を要請し、自分は白紙に戻ってそれを受け入れると強調した。これに対して、金九は「いまだに国内の事情に暗く、臨時政府の閣僚も大部分がまだ帰国できていない」と答えるだけであった。[78]

5　左右両派の反応とホッジ、李承晩

帰国後の金九の行動は「総団結」の主張と各党派への慎重な対応を特徴としていた。許憲との会談後、その内容が人民共和国側に都合よく歪められて報道されたために、厳恒燮がそれに強く抗議するという場面があったが、

四人の指導者との会談でも、金九は自分の意見をほとんど述べなかった。しかし、右派勢力の先頭に立つ宋鎮禹と韓国民主党は、そのような臨時政府の妥協的な態度を警戒し、臨時政府第二陣の帰国を待ちわびたようである。それにもかかわらず、洪震議政院議長、趙琬九財務部長、趙素昂外務部長、金元鳳軍務部長、崔東旿法務部長、申翼熙内務部長、張建相、成周寔国務委員などの到着は遅れた。一二月一日に米軍機で上海を出発したが、天候不順のために地方飛行場に着陸し、論山で一泊した後、ようやく一二月二日夕刻にソウルに到着したのである。宋鎮禹、金性洙、金俊淵、張澤相らの韓国民主党幹部は、一二月四日に申翼熙内務部長を訪問して、臨時政府を前面に押し立て、列国の承認が得られるまで直進するべきであると説得した。さらに、一二月六日、韓国民主党は臨時政府を絶対に支持する国民運動を展開し、その国際的承認を促進することを決議した。米軍政府に対しても、あらゆる内政機関を臨時政府に委譲するように要望し、臨時政府に対しては、政府の不改造、人民共和国への解散命令、光復軍の整備、連合国への外交使節派遣、愛国公債の発行を建議した。宋鎮禹はさらに、一二月九日の記者会見で、「二七年もの間、血を流して戦った我々の政府が現存するにもかかわらず、いま一つの政府をつくるのは間違いである」と主張し、「赤色政権をもってして、我々は独立できない」と断言した。しかし、これらの主張は、臨時政府に過剰な忠誠を表明するものではあっても、「国内の各党派と協力したうえで臨時政府を設立し、その後、臨時政府が全国的な選挙を通じて正式政府を設立できるようにする」との金九の方針とは明らかに対立するものであった。(79)

他方、左翼勢力の中心である朝鮮共産党は、金九と臨時政府に対して慎重ながら原則的に反応した。一一月三〇日、ソウル中央放送局は「進歩的民主主義の旗の下で」と題する朴憲永代表の政見（鄭泰植による代読）を放送したが、それは金九や臨時政府に直接的に言及することなしに、民主主義統一政権の樹立について、「海内海外の数個の政党の結集によってなされるのではなく、そのほかに大衆的な組織である全国労働組合評議会、全国

青年総同盟、全国婦女同盟、天道教など、各民主団体もこれに参加しなければならない」と主張したのである。これが朝鮮共産党の統一戦線論であり、それは必ずしも朝鮮人民共和国を絶対視したり、それを完成形と考えたりしたわけではなかった。事実、一二月一二日の記者会見において、朴憲永は民族統一戦線についてさらに率直に論じて、「民族統一戦線は下からの大衆を基礎として結成される統一がもっとも重要であり、内容も充実したものである」と指摘したが、それと同時に、「下からの統一と上からの統一が同時に進行し、実現してこそ、完全な民主主義的統一が実現されるだろう」と主張した。また、「半半数の勢力均衡をもって左右翼が連合しようという我々の正当な提議に対して、右翼政党は難色をみせるだけでなく、過半数の絶対多数を主張する」と非難したのである。さらに、臨時政府に対しては、「亡命政府が一種の臨時政府であるかのように宣伝するのは、統一のための努力ではなく、かえって分裂を助長する行動であらざるをえない」「統一政府樹立を提案している国内の進歩勢力と接近する努力を惜しんではならず、いま少し王家式的、君主式的な生活雰囲気から解脱する……必要がある」と批判した[80]。

共産党と右派勢力あるいは臨時政府との間の交渉がどのように進展していたのかは明らかではない。しかし、朴憲永の談話の内容からみて、共産党は大衆組織を基礎とした左右の対等合作を要求していたようである。また、民族革命党（金奎植、金元鳳）など、臨時政府内の左派勢力は当初から共産党の推進する民族統一戦線に傾斜していたようである。しかし、韓国民主党などの右派勢力は臨時政府自体の正統性を主張していたし、臨時政府要人の多くは数字よりも名分を重視していた。興味深いことに、同じ一二日の記者会見で、臨時政府の趙素昂外務部長は「国内統一が緊急かつ切実に要求されているこのときに、国家の統一もまた必要である……国旗もまた大極旗に統一されなければならないことはいうまでもなく、さらに年号も統一されなければならない……飯ができる前に釜をめぐって争うことは不当であると同時に、機械的な平等、すなわち五対五の勢力をもてというよりも

……私は四をもち、相手方には六をもてといいたい」と語っていた。同じような趣旨は、一二月二〇日、臨時政府の国務委員である成周寔によっても表明された。成は「現在において、人民共和国も満足のいくものではなく、また臨時政府も完全ではありえないといえるだろう。ただ臨時政府は二七年間の歴史をもっている……我々は三・一運動当時国内から送ってよこした政府を我々の手で海外に保管してきたが、この度それを持ち帰り、国内同胞に戻すことを願うだけである」と答えたのである。年老いた臨時政府指導者たちにとって耐え難かったのは、自らの半生を賭けて守護してきた臨時政府が、過渡的な選挙管理政府を組織するための暫定的な母体としても認定されないことだったのだろう。(81)

他方、ホッジ司令官やその顧問たちが李承晩、金九、金奎植らの周囲に準政府的な「拡大連合顧問会議」や「統治委員会」を設置する構想をもっていたことは、すでにみたとおりである。これらの構想は国務省の反対により実行に移されなかったが、ホッジは金九、金奎植らの帰国を利用して、南朝鮮内の政党連合を促進し、米軍政府の負担を軽減する類似の組織を設置する計画をもち続けていた。また、それは臨時政府による主権行使を認めるものではなかったが、それだけに李承晩、呂運亨、安在鴻などの参加を可能にするものでもあった。その意味で注目されたのが、一一月三〇日のホッジと呂運亨の会談である。その会談後に、呂運亨はホッジが「臨時政府領袖が帰国したこのときに、貴国の民族統一問題は決定的な段階に入った」「絶対に公平な立場に立脚して、この機会に統一結成を完成させたい」と主張したとし、左右双方に満足のいく腹案が提示されたので、それに積極的に協力するつもりであると語ったのである。それを裏付けるかのように、一二月六日、ホッジ司令官は米軍政庁で金九、李承晩、そして呂運亨と個別的に会談し、その翌日に安在鴻と、さらにその翌日に宋鎮禹と会談した。そのような状況の下で、一二月一二日、ホッジ司令官は朝鮮人民共和国の政府としての活動を非合法化したのである。(82)

ただし、アーノルド軍政長官はその前日の一一日午後に朴憲永と極秘に会談し、有力政党の代表者から構成される「国家評議会」を組織して、米軍政府の下にあるすべての行政機構を指導する構想を提示していた。興味深いことに、アーノルドはまもなくロンドンで米英ソ外相会議（実際にはモスクワで開催された）が開催され、朝鮮問題が討議されることを示唆して、朴憲永の参加を強く要請した。アーノルドは「もしこの（外相）会議で南朝鮮の諸政党・社会団体の連合体が組織された事実が承認されなければ、国家評議会を他国の後見に委ねる以外の方法はない。だから、独立を獲得することを願うならば、連合体を構成しろ！」（括弧内引用者）と要求したのである。これに対して、朴憲永は従来の主張を繰り返したが、国家評議会が米軍政府の下部機構としてそれに服従するのか、それともその外部に存在して、将来、民族政府を樹立するための基礎になるのかに関心を示した。アーノルドは米軍政府の内部に置かれるにしても、外部に置かれるにしても、その連合体が迅速に結成されなければならないし、もし連合体の努力が認定されれば、米軍政府の権限がそれに委任されるだろうと回答した。さらに、それが結成されなければ、海外から帰還する韓国人に援助を提供する問題、憲法制定問題、食糧問題、財政問題、インフレ問題、日本人が所有する土地の没収問題、農業政策問題その他に対応できなくなると説得した。最後に、アーノルドは「もし貴兄が祖国を愛するのであれば、このような提案を拒絶してはいけない」と忠告した。また、一二月一九日には、ホッジ司令官も朴憲永と会談した。ホッジは朝鮮人民共和国政府を非合法化し、朴憲永の退路を断ったうえで、米軍政府への積極的な協力を迫ったのである。(83)

他方、ホッジとアーノルドの一連の行動は、李承晩による独立促成中央協議会の活動再開を促した。一一月二日の会合での結論に基づいて、李承晩が招集した第一回詮衡委員会は詮衡委員の選定が党派的に偏重していたために流会に終っていたが、李承晩は新しく金志雄、金錫璜、安在鴻、金綴洙、孫在基、白南薫、鄭魯湜を詮衡委員に指名し、一二月五日に第二回詮衡委員会を招集して、協議会の中央執行委員の選定に入ったのである。この

ような動きを背景に、李承晩は一二月一〇日に独立促成中央協議会について「人民の世論を代表する機関として、わが政府が樹立されるまでの過渡機関であるので、臨時政府国務院（国務委員会か）とは直接関係がない」（括弧内引用者）と表現して、一七日に「独立促成会は政党人の代表を糾合しようとするものでも、彼らに政見争いをさせる機関でもない。そこに政党人が入ってくることがあっても、それは政党の代表としてではなく、個人として集まるものである。国を探し出そうとする愛国者たちの集まりになるだけだ」と語った。李承晩はそれまでの政党連合運動を断念して、政党よりも個人の運動として、独立促成中央協議会の運動を推進する決意を表明したのである。さらに、そのような李承晩の動きは呂運亨と人民党の動向に影響を与えた。人民党総務局長である李如星は、一二月一七日の記者会見で、独立促成中央協議会を媒介にして、人民共和国と臨時政府が過渡的な連立政権を樹立する可能性を示唆し、「根本方針においてわが党の考えとまったく背馳するものでなければ、中央協議会自体を生かすために努力する用意もある」との注目すべき見解を表明した。ホッジが呂運亨に示した腹案とは、そのようなものだったのかもしれない。それを「国家評議会」と呼ぶことも不可能ではなかった。(84)

しかし、ホッジや呂運亨の努力はすぐに水泡に帰した。一二月一七日夕刻、ソウル中央放送局を通じた政見放送で、李承晩が「共産党に対する私の立場」と題する爆弾的な反ソ・反共演説をして、政党連合運動を不可能にしてしまったからである。この演説は「現在の我々の状態からみて、韓国は共産党を願っていないことを世界各国に対して宣言する」という冒頭の一句に始まり、ポーランドにおいて、また中国において、共産主義過激分子が国の独立を破壊しており、朝鮮においても同じように行動していると非難するものであった。李承晩は、そのなかで、「この分子たちはソ連を自分たちの祖国と呼ぶというが、もしこれが事実ならば、我々の要求するところは、この者たちが韓国から離れて、自分たちの祖国に帰り、自分たちの国に忠誠を尽くすことである」と極論したのである。また、李承晩は独立促成中央協議会の組織に言及し、共産主義者を懐柔するために多くの日数を

費やしたが、今後は協力できる者とだけ協力していくとの方針を明らかにした。これに対して、一二月二三日、朴憲永は朝鮮共産党中央委員会代表の名義で声明を発表して、李承晩を「民族反逆者および親日派の救世主」と糾弾し、翌日、独立促成中央協議会との一切の関係を破棄した。また、安在鴻や呂運亨も、李承晩の反共演説によって政治連合運動が挫折したことを認めざるをえなかった。人民党の李如星は、呂運亨を代理して、一二月二四日、李承晩の演説を「ファッショ的独断であり、反統一的行動である」と非難し、臨時政府の態度を注視するとの談話を発表した。安在鴻もまた、一二月二五日、臨時政府の特別政治委員会が独立促成中央協議会の企図したものを発展させることに期待を表明した。(85)

李承晩の演説は計画的になされたものだろう。すでに一二月一三日までに、李承晩は『ニューヨーク・タイムズ』の特派員に「米ソ関係は真珠湾前の日米関係に酷似している」「この状況が漂流することが許されれば、それだけ破局を回避できる可能性が少なくなる」との厳しい冷戦認識を示し、ソ連に対する宥和政策のために臨時政府の承認を阻止しているとして、米国務省を非難していたのである。これは李承晩特有の冷戦「先取り」の国際的な表明であった。国内的にも、依然として臨時政府を支持する姿勢に変化はなかったが、李承晩はソ連や共産党に対して宥和的な臨時政府の政策と決別し、政党連合よりも「個人の名声」に依存することを決意したのである。これ以後、両者の政策的な対立は明白になった。たとえば、一二月一九日、ソウル運動場で開催された「大韓民国臨時政府凱旋全国歓迎大会」で、金九は「臨時政府は決してある一階級、一党派の政府ではなく、全民族、各階級、各党派の共同の利害と立場に立脚した民主団結の政府である。したがって、わが政府の唯一の目的はただ全民族を総団結させ、日本帝国主義を打倒し、韓国に真正の民主共和国を建立することにあります」「我々はただ（中米ソ）三国の親密な合作を基礎にしてのみ自主独立を迅速に達成することができるのです」（括弧内引用者）と主張し、李承晩の反ソ・反共路線と明確に一線を画したのである。また、臨時政府の成周寛国務

委員は、一二月二〇日の記者会見で、「李承晩博士は臨時政府の外交使節である……李博士の発表はどこまでも博士個人が責任を負わなければならない問題である」と述べ、南北朝鮮、左右両派、各党各派の革命人士を網羅した統合会議を開催し、そこで統一問題を議論することを提案した。これは「臨時政府当面の政策」第六条にある「民主領袖会議」を指すものだろう。さらに、その翌日、張建相国務委員も、「左翼勢力とは極力協調し、握手しなければならないこのときに、あのような言葉は我々としては想像もできないことであり、私は絶対にあの放送に賛同しない」と明言した。(86)

李承晩演説に対する臨時政府の反応は、それによって臨時政府がむしろ行動の自由を獲得したことを示していた。金九自身も、一二月二七日の「三千万同胞に告げる」と題するソウル中央放送局の政見演説で、親日派と民族反逆者を強く批判するとともに、「もっとも進歩した民主主義を実現するために、政治、経済、教育の均等を主張する」（三均主義）と言明し、普通選挙の実施、土地および大生産機関の国有化、義務教育の国費による実施などを主張した。それらはいずれも、一九四一年一一月の大韓民国建国綱領に掲げられたものである。言い換えれば、内部に左派勢力を抱える統一戦線政府として、臨時政府はすでに朝鮮共産党や左派勢力と多くの政策を共有していたのである。そのことを意識して、金九は「もっとも進歩した民主主義」を掲げ、あえて土地および大生産機関の国有化を表明したのかもしれない。また、親日派と民族反逆者粛清の主張も、李承晩を取り巻き、反共路線を鮮明にする韓国民主党の指導者たちに向けられていたのかもしれない。(87)

おわりに

戦争終結後、米国政府、とりわけ国務省は朝鮮人指導者の南朝鮮への帰国に慎重に対応した。米軍の南朝鮮進

駐が必ずしも迅速ではなかったので、政治的な影響力をもつ独立運動指導者の早期帰国が米軍政府の樹立や軍政施行の妨げになることを懸念したのだろう。また、民族自決原則に固執し、ソ連との共同行動を重視した国務省は、特定の独立運動指導者の帰国が優先され、それが政治的な意味をもつことを警戒した。アチソン国務長官代理は、独立運動指導者たちが同じ条件の下で帰国し、軍政の枠内で「個人の資格」で協力することを期待したのである。しかし、マッカーサー総司令官は李承晩の帰国を優先し、ホッジ司令官とともに帰国途上の李承晩と東京で会見して、神話の創造に協力した。李承晩は政治的な混乱を収拾する求心点としての役割を期待され、一〇月一六日に「民族の英雄」として帰国したのである。左派勢力は李承晩が朝鮮人民共和国主席に就任することを強く希望したが、帰国した李承晩はそれへの回答を留保したまま、「まず一つに固まろう」と宣言して、独自の政党連合運動を開始した。李承晩は韓国民主党を中心とする右派勢力と緊密に連携しただけでなく、安在鴻らの中間的な諸党派の支持を獲得したのである。さらに、共産党と行動を共にしていた呂運亨も、李承晩の名声と米軍政府の圧力の前に、それから一歩距離を置いて、新しい役割を模索し始めた。その後、独立促成中央協議会の結成を契機に、李承晩が人民共和国主席への就任を拒否して、右派路線を明確にすると、朝鮮共産党はそれに激しく反発して、独自の民族統一戦線論を展開して対抗した。労働運動や農民運動を組織化し、地方人民委員会の組織を拡大するために全力を尽くしたのである。李承晩の帰国がもたらした事態は、結局、右派勢力の強化と左右対立の激化であり、冷戦の「先取り」にすぎなかった。

他方、三・一独立運動以来の歴史をもつ大韓民国臨時政府は、上海から重慶に移転し、金九主席、金奎植副主席の下で再び統一戦線組織としての形態を整えていた。延安にあった華北朝鮮独立同盟と一九三〇年代後半に満洲で抗日武装闘争に従事した金日成らの共産主義者を除いて、臨時政府は中国内のほとんどすべての独立運動グループを網羅したのである。しかし、臨時政府と金九、金奎植らの帰国は遅れに遅れた。一一月五日に蔣介石が

用意した二機の中国機に搭乗して上海に到着したが、そこで一八日間も待機した。しかも、一一月二三日にソウルに向かう米軍機に搭乗できたのは、金九、金奎植らの第一陣、一五人にすぎなかった。上海に派遣された米軍機が中型輸送機一機だったからである。米軍政府としては、臨時政府の集団的な帰国を警戒し、それを遅らせ、分断しようとしたのだろう。しかし、それにもかかわらず、重慶での金九と蔣介石やその側近との協議、九月三日に発表された「臨時政府当面の政策」の内容、さらに帰国後の実際の行動にみられるように、終戦直後に臨時政府が試みたのは、極端な政治的立場を貫徹することでも、左右の政治勢力の一方に加担することでもなく、「総団結」の主張の下で統一戦線組織としての役割を維持することにほかならなかった。それが目標にしたのは、北朝鮮地域や朝鮮共産党を包含する政党連合を実現して、全国的な普通選挙を実施するための国内過渡政権を樹立するために、各界代表や民主領袖が結集する会議を招集することにすぎなかったのである。それは李承晩が到達した反ソ・反共の立場とは異なり、臨時政府としての正統性の主張を除けば、むしろ国務省や米軍政府が期待すべきものであった。しかし、さまざまな試行錯誤の結果として、解放後三ヵ月を経過した一九四五年一二月の南朝鮮に出現したのは、米軍統治下で朝鮮人民共和国、独立促成中央協議会、そして大韓民国臨時政府という三つの統一戦線組織が分立し、それぞれが「統一」を叫びつつ、「分裂」を深めるという状況であった。

(56) Maochun Yu, *OSS in China: Prelude to Cold War* (New Heaven: Yale University Press, 1996), pp. 214–216, 225–226. 鄭秉峻の解説、国史編纂委員会『大韓民国臨時政府資料集13』（韓国光復軍Ⅳ）、（ソウル、国史編纂委員会、二〇〇六年）、iii－xiv。林炳稷『林炳稷回想録』、二四三―二四五頁。ドノヴァンは情報調整官(C.O.I.)の時期から米国内での李承晩の活動に注目していた（Bradley F. Smith, *The Shadow Warriors: O.S.S. and the Origins of C.I.A.*, New York: Basic Books, 1983, p. 130）。

(57) 張俊河『石枕』下巻（安宇植訳、サイマル出版会、一九七六年）、三〇七―三一六頁。金九発信、呉鉄城受信

「敵軍から脱出し帰順した韓国青年四七人のために借款を要請する公函」、一九四五年二月六日、崔鍾健『大韓民国臨時政府文書輯覧』（ソウル、知人社、一九七六年）、一二一—一二二、三七〇—三七三頁。Monthly Reports for Eagle Project, Sargent to Helliwell and Kurause, 30 May, 29 June and 31 July 1945; Weekly Report for Eagle Project, Koger to Handy, 5 August 1945. 以下、トクスリ計画に関する資料は『大韓民国臨時政府資料集13』（前掲）に収録されたＯＳＳ資料を使用した。なお、韓国光復軍はそれほど大規模なものではない。実際に第二支隊に所属した張俊河によれば、西安の第二支隊（李範奭隊長）こそ三〇〇余名の兵力を擁したが、重慶にある第一支隊（金元鳳隊長）はせいぜい一〇数名、臨泉（岐陽）にある第三支隊（金学奎隊長）は学徒脱走兵一〇数名を中心にする一五〇余名程度にすぎなかった（張俊河『石枕』下巻、三六四—三六五頁）。

(58) Sargent to Helliwell and Roosevelt, 5 August 1945; Sargent to Helliwel, Roosevelt and Krause, 5 August 1945; Yu, *OSS in China*, pp. 229–230. 張俊河『石枕』下巻、三二八—三三二頁。金九『白凡逸志』（ソウル、国士院、一九四七年）、三四八—三五一頁。

(59) Heppner to Bird, 10 August 1945; Hector to Heppner, 13 August 1945; Davies to Heppner, 13 August 1945; Hector to Heppner, 13 August 1945; Bird to Heppner, 14 August 1945; Heppner to Bird, 14 August 1945. 金九『白凡逸志』、三五〇—三五一頁。Yu, *OSS in China*, p. 230.

(60) Bird to Hector, 22 August 1945; Preliminary Report of Mission to Keijo, Korea, for the Relief of Prisoners of War Interned in that Country, Bird to Heppner, 23 August 1945; INDIV to Fletcher, Wampler and Krause, 29 August 1945. 張俊河『石枕』下巻、三四三—三四七頁。李範奭『民族と青年—李範奭論説集—』（ソウル、白水社、一九四八年）、三一—三二頁。バード大佐の報告によれば、飛行場には日本軍の中将一名および少将一名、そして一個中隊の兵士が待ち構えており、彼らはＯＳＳチームが占領軍と何らかの関係にあるのか、降服条件を議論するために来たのかを知りたがった。それに対しては、バードは「連合軍捕虜にできるだけの援助と慰労を提供するという目的だけのために、ウェデマイヤー将軍によって派遣された」と回答して、そのための協力を要請した。また、できるだけ早期に戦争捕虜を撤収させることに関心をもっており、そのために調査することも目的に含まれると告げた。その姓名を明らかにしなかったが、「参謀長と思われる日本軍中将」（上月良夫司令官か）は「捕虜が安全で良好な状態

にあり、適切に取り扱われているとウェデマイヤー将軍に伝えるように」主張し、それ以上の情報提供を拒絶した。他方、第一七軍の神崎長参謀はその日記の八月一八日の条に「竜山飛行場に米軍機ダグラス一機着陸。西安から早朝出発し俘虜慰問に来たものである。気の立った日本人が居り、歓迎したがる半島人が居るので、飛行場から出ないで引返させることになったが、油補給の為一泊」と記した（神崎長『神崎大佐日記』、防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵、一一七頁）。これが筆者の発見した唯一の日本側史料である。

(61) Memorandum for the President by Donovan, 18 August 1945; Yu, *OSS in China*, pp. 229-230, 250-251; Smith, *The Shadow Warriors*, p. 314.

(62) 金九『白凡逸志』、二七九—二八三、二八八—二九三頁。Dae-Sook Suh, *The Korean Communist Movement, 1918-1948* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1967), pp. 11-17. 韓詩俊「李承晩と大韓民国臨時政府」、柳永益編『李承晩研究』、一八八—一九五頁。潘炳律「李承晩と李東輝」、柳永益編『李承晩研究』、二八一—二九三、三〇四—三一〇頁。

(63) 孫世一『李承晩と金九』（ソウル、一潮閣、一九七〇年）、四—一四頁。金喜坤『大韓民国臨時政府研究』（ソウル、知識産業社、二〇〇四年）、三一五—三四八頁。金九『白凡逸志』、二八八—三一三頁。

(64) 金九『白凡逸志』、二七九—二八一、三二二—三二四頁。その付録「私の願い」も参照した。姜萬吉『朝鮮民族革命党と統一戦線』（ソウル、和平社、一九九一年）、五五—五六、一二〇—一二三、二七二—二七六頁。金喜坤『大韓民国臨時政府研究』、一五九—一六〇頁。「一九三六年の在支不逞朝鮮人の不穏策動状況」、金正明編『朝鮮独立運動Ⅱ—民族主義運動篇—』（原書房、一九六七年）、五五八—五九三頁。

(65) 金九『白凡逸志』、三四二—三四七頁。李炫熙『大韓民国臨時政府史』（ソウル、集文堂、一九八二年）、三一九—三二二、三三三—三三四頁。姜萬吉『朝鮮民族革命党』、二四三—二五八頁。趙凡来『韓国独立党研究一九三〇—一九四五』（ソウル、先人、二〇一一年）、一七五—一八〇、一八三—一九一頁。黄苗熺『重慶大韓民国臨時政府史』（ソウル、景仁文化社、二〇〇二年）、一一—一四、五五—五六、六七—六八、四四三—四四八頁。

(66) 中国軍事委員会「対韓国在華革命力量扶助運用指導方案」、一九四一年一二月、秋憲樹編『資料韓国独立運動1』（ソウル、延世大学校出版部、一九七一年）、六七一—六七三頁。一九四一年一〇月三〇日の蔣介石の指示（「陥川侍

六代電）については、その内容の一部が国民政府軍事委員会快郵代電（蔣介石発信、呉鉄城受信、一九四二年一〇月九日）に引用されている（同上、六七三―六七四頁）。蔣介石の要請にもかかわらず、金九と金元鳳の合作は容易ではなかった。蔣介石の指示を発出した唐縦（軍事委員会侍従室第二処第六組長）も、その日記の一九四一年一〇月二八日の条に「自委座允准成立韓国光復軍後、朝鮮義勇隊金若山等反対極烈、対金九等不惜破壊、毓麟来言同情熙若山等」と記している（唐縦『在蔣介石身辺八年』、台北、群衆出版社、一九九一年、二三六頁）。なお、「対韓国在華革命力量扶助運用指導方案」は、翌年一二月一五日に「扶助朝鮮復国運動指導方案」として結実し、二五日に蔣介石の承認を獲得した（崔鍾健『大韓民国臨時政府文書輯覧』、六七頁）。姜萬吉『朝鮮民族革命党』、二五九―二六〇頁。趙凡来『韓国独立党研究』、二六一―二六四、二七八―二八一頁。黄苗熺『大韓民国臨時政府史』、一九―二一頁。「一九四〇年の在支不逞朝鮮人の不穏策動状況」、金正明編『朝鮮独立運動Ⅱ』、六五五―六八八頁。権寧俊は朝鮮義勇隊の光復軍への編入が中国軍事委員会の指示によるものであったと指摘した。また、左右合作後も、臨時政府内の党派紛争は深刻であり、金九主席らの国務委員が辞表を提出することもあった（権寧俊「抗日戦争期における韓国臨時政府の政治活動と中国国民政府」、『県立新潟女子短期大学研究紀要』第四四号、二〇〇七年、二五七―二五八頁）。

(67) Suh, *The Korean Communist Movement*, pp. 217–230, 281–293. 姜萬吉『朝鮮民族革命党』、二九五―三〇三頁。

(68) 「金九の議政院での西安視察報告」（第三九回臨時議政院会議）、一九四五年八月二二日、国史編纂委員会『大韓民国臨時政府資料集13』、二五七―二六〇頁。金九『白凡逸志』、三五一―三五三頁。議政院での報告で、金九はトクスリ計画が実施されたのと同日（一八日）に重慶に戻ったと証言した。しかし、OSS資料は一七日に重慶に戻ったと推定した（Krause to Roosevelt, 18 August 1945）。

(69) 「呉秘書長接見韓国臨時政府金九主席談話要点」、一九四五年八月二二日、崔鍾健『大韓民国臨時政府文書輯覧』、四二九―四三一頁。

(70) 『大韓民国臨時政府資料集13』、二五七―二六〇頁。黄苗熺『大韓民国臨時政府史』、四九―五〇頁。金九『白凡逸志』、三五二―三五三頁。

(71) 金九「国内外同胞に告げる」、一九四五年九月三日、『白凡金九全集』第五巻（大韓民国臨時政府Ⅱ）（ソウル、大韓毎日新報社、一九九九年）、六五六―六五七頁。

(72) 小此木政夫「米軍の南朝鮮進駐―間接統治から直接統治へ―」、赤木完爾・今野茂充編著『戦略史としてのアジア冷戦』（慶應義塾大学出版会、二〇一三年）、八三―一〇五頁。

(73) 張俊河『石枕』下巻、三六一―三六三頁。「総裁接見韓国臨時政府主席金九紀録」、一九四五年九月二六日、『白凡金九全集』第五巻、六七二―六七四頁。鮮于鎭「転換期の内幕―臨時政府の帰国―」、『朝鮮日報』、一九八一年一月五日―一〇日。呉鉄城発信、金九受信、一九四五年一一月二一日、崔鍾健『大韓民国臨時政府文書輯覧』、一七六、四六二頁。

(74) 乗機者名単、『白凡金九全集』第五巻、六九八頁。もっとも、二三日の記者会見で、厳恒燮は上海に向かった金九一行を三二名と説明している。三名の追加の搭乗者がいたのだろう（『中央新聞』、一九四五年一一月二四日）。崔鍾健『大韓民国臨時政府文書輯覧』、一六六―一七四頁。張俊河『石枕』下巻、三六八頁。

(75) 『自由新聞』一九四五年一一月一九日。『中央新聞』一九四五年一一月二四日。張俊河『石枕』下巻、三七六頁。

(76) 張俊河『石枕』下巻、三七六頁。『自由新聞』一九四五年一一月二四日。『ソウル新聞』一九四五年一一月二四日。上海・具益均発『中央新聞』一九四五年一一月二四日。

(77) 『自由新聞』一九四五年一一月二五日、二六日。『中央新聞』一九四五年一一月二六日。ソウル中央放送局を通じた帰国挨拶（一九四五年一一月二四日）、張時華編『建国訓話』（ソウル、敬天愛人社、一九四五年）、五頁。張俊河『石枕』下巻、三九四、三九八―四〇九頁。

(78) 『自由新聞』一九四五年一一月二七日。『中央新聞』一九四五年一一月二八日。張俊河『石枕』下巻、四一〇―四一一、四二五―四三一頁。

(79) 『中央新聞』一九四五年一一月二九日。『東亜日報』一九四五年一二月五日。『ソウル新聞』一九四五年一二月九日。張俊河『石枕』下巻、四四六―四五〇頁。

(80) 朴憲永「進歩的民主主義の旗の下で―共産党の政見放送」、一九四五年一一月三〇日、『朴憲永全集』第二巻、九七―一〇〇頁。朴憲永「民族統一戦線と亡命政府について」、一九四五年一二月一二日、『ソウル新聞』一九四五年一二月一三日。

(81) 『ソウル新聞』一九四五年一二月一三日。『ソウル新聞』一九四五年一二月二一日。

(82) 『ソウル新聞』一九四五年一二月八日。『東亜日報』一九四五年一二月一〇日。

(83) 朴憲永同志とアーノルドとの会談、一九四五年一二月一一日、『朴憲永全集』第二巻、一一〇―一一三頁。『ソウル新聞』一九四五年一二月二一日。

(84) 『ソウル新聞』一九四五年一二月七日、一二月一八日。『東亜日報』一九四五年一二月一一日。

(85) 李承晩「共産党に対する私の立場」、一九四五年一二月一七日、『ソウル新聞』一九四五年一二月二一日。朴憲永「共産党の建設的役割を無視し、民族独立に破壊行為―ファシスト李博士に反省要求―」、一九四五年一二月二三日、『朴憲永全集』第二巻、一二六―一三一頁。而丁朴憲永記念事業会編『而丁朴憲永一代記』（ソウル、歴史批評社、二〇〇四年）、二五四―二五五頁。『ソウル新聞』一九四五年一二月二五日、二六日。『自由新聞』一九四五年一二月二六日。

(86) Richard J. H. Johnston, "Korea Accuses U.S. of Appeasing Soviet; Says Moscow Policies Hurt World Peace," *New York Times*, 18 December 1945. 李昊宰『韓国外交政策の理想と現実』、一六二―三頁。『ソウル新聞』一九四五年一二月二一日、二二日。

(87) 『東亜日報』一九四五年一二月三〇日。「大韓民国建国綱領を制定し、ここに公布する」、一九四一年一一月二八日、『白凡金九全集』第五巻、九五―一〇〇頁。